

編集後記

今号を編集するにあたっては、2019年10月15日の編集委員会にて原稿募集要領と特集のテーマならびに執筆依頼の方針などが決定されました。その方針のもとに今号は前学長谷釜了正先生の特別寄稿、特集「東京とオリンピック・パラリンピック」、研究論文2編、研究報告8編、プロジェクトの一環であるメダリストの軌跡13編、書評1編、視察報告1編、事業報告1編という充実した内容で発刊できる運びとなりました。執筆いただいた皆様、インタビューにご協力いただきました方々ならびに査読をはじめとしてご協力いただいた方々に編集委員会を代表して御礼申し上げます。

各原稿の締め切りが迫りつつある2月中旬に、新型コロナウイルス感染症の影響が大学の行事や研究活動に出てまいりました。2月27日開催予定だった本学総合スポーツ科学研究センター主催の三研究所合同シンポジウムも中止になり、本学名誉博士猪谷千春先生の講演も叶いませんでした。3月24日にはIOCが東京五輪の延期を発表しました。そして編集作業が大詰めを迎える4月上旬には国内に緊急事態宣言が出され、本学においてもキャンパスが封鎖されました。日常生活や仕事が制限される中で、関係者の皆様には校正作業をはじめとして大変なご協力をいただきました。

今号の構成を振り返ってみたいと思います。谷釜先生は学長として本研究所の設立に松浪理事長とともにご尽力され、初代の所長を務められました。研究所への期待を込めつつ、オリンピックとは何かを歴史研究者の視点から広い視野で述べられています。特集では舛本先生、大林先生からもセミナー講演をもとにご寄稿いただきました。お二人ともに学会内外で広く活躍されている研究者です。尾川論文、富田・関根論文、松瀬論文は過去から現在にいたる東京という都市でのオリンピック開催について考察した論文です。研究論文では初めて海外からブザンソン大学オリンピック研究センター長を務める Monnin 博士の投稿がありました。ブザンソン大学と本研究所の研究交流の始まりを告げる論文となるでしょう。日比野・東原論文はオリンピックの選手育成政策について貴重な情報を提供するものです。研究報告には現在進行形の研究が紹介されています。メダリストの軌跡は今回も日体大オリンピックの苦闘の歴史が刻まれているとともに、学生たちへの期待を込めた温かいまなざしが注がれています。

世界的なパンデミックと東京大会延期という歴史の渦の中で今号は発行される、との言い方は大げさに過ぎるかもしれませんが、しかし、コンサートも展覧会もスポーツの試合もない春を過ごし、オリンピック・パラリンピックをはじめとするスポーツのない夏をわれわれが迎えることは事実です。パンデミックは、すべての人に暗黒の日常生活をもたらしました。そして世界にはパンデミックに限らず紛争や貧困によって、スポーツや芸術を奪われた人々が日常を生きています。オリンピックも戦争によって奪われた歴史があります。失って初めて大切なものの価値に気づくのは人間の愚かさ所以なのでしょうが、それらの価値を作り上げたのも人間です。パンデミックと紛争と貧困を超えて、オリンピックの価値（というものがまだあるならば）をすべての人々の日常に届けるための知恵を探求したい。この精神が本誌を支えています。

編集委員長 関根 正美